第３回講義　ウェスレーの人間理解と罪理解

学習者の目的

① 神の像の教理について理解する
② ウェスレーの「堕落」についての見解を理解する
③ 偶像としての罪、関連的な罪の理解について理解する

テキストの要約　藤本満著　『ウェスレー』　第１章　人間と救い　117頁から140頁

*ウェスレーには救いの順序があり、堕落した人間の性質を神の像に回復させること。
（１１７頁）

*神の像、全き愛とは、神と人への愛が充満して利己的な思いを排斥し、ほかのすべての愛や関心を支配、制御している状態をいう。（１１９頁）

*ウェスレーの目標は、人間存在を神の像のもとに完全に造り変え、見神 (visio Dei)を達成すること。（１２０頁）

*原罪の教理：人間は生まれながらにして全的に堕落した存在である。

①初期においては人間の原初の姿を描きながら、原罪の事実をそれと比較対照することで、ことさら救いの必要性・キリスト教の信憑性にスポットライトをあてる。

②原罪の教理は信仰による義認の教理のバックボーン

③ウェスレーが預言的使命を担う。当時の英国に充満していた文化的退廃、社会的腐敗を弾劾する。ジョン・テイラーとの論争により、原罪の教理を守り抜く姿勢を持つ。

*救いは神の像の回復　聖霊の働きにかけに積極的に応答することが重要。

ウェスレーの引用

「人間は、単なる感覚や、理解のない身体的なものではなく、土の塊、土のかけらであり、創造主の聖霊により、感覚と理解だけでなく、様々な情感を抱き意志を働かせる存在である。すべてのものの冠的な存在として、自由を持ち、愛情と行動を方向づけながら、何が善で何が悪であるかを自己決定をする力がある存在である。」

（人間の堕落について）Works 2:400-401

原罪についてウェスレーは「それ故に、この基礎を取り去るならば、人間は本性的におろかで罪深く、キリスト教の系統はばらばらになってしまう」と語っています。

（原罪の教理）　Works 9:194.

神の像と人間

人間が〈神の像〉に刻印されたということは、単に自然的像（理性・意志・自由）と政治的像（被造物を支配する力）とを享受したというだけでなく、人間はその魂に道

徳的像がその中心であるということは言うまでもない。この道徳的像は愛の律法-“神を我々の父そして救い主として愛し、神の故に人類すべてを同じように愛すること”に集約されます。（藤本満　ウェスレー、１１８－１１９頁）

人間性

ウェスレーの人間性理解の根本は、人間は関係的な存在であるということです。人間は関係をもって生きる存在として創造されました。人間は愛のために、実際に愛するために創造されたのです。ワインクープは、神の像(Imago Dei)は愛する能力であると語りました。レイ・ダニングは、「私たちは神や他者を愛するために造られた。それ故に、自己と世に対する適切な愛を保持している」と語ります。つまり、それが人間の中の自然の神の像であり、性質や人間に決定的な能力に言及する一方で、道徳的な神の像は、神が人間に意図したホーリネスと愛の性質について言及するものです。」と語っています。（神の像は、以前は「理性」であると言われてきましたが、現在は「応答性」であると言われています。我と汝という親しい関係を人は神によって提供されているのです。神の愛にどのように応えるかが問われているのです。

ウェスレーは、〈HappyとHoly〉の組み合わせを尊重した。人間存在の主要な目的をウェスレーに尋ねると、神を愛し、神に従うこと。そして“被造物の至上目的は神のうちに幸福を求めること”。（藤本　１２０頁）

原罪

西洋の神学は、原罪の状態は、生まれつきの人間性の崩壊であり、たとえ私たちが個人的にはそのようなことを望んでいなくても、神の前に私たちを罪ある者とするものです。罪責と崩壊は人間の中に引き継がれているものです。しなしながら、ウェスレーは原罪が罪責をもたらすのではなく、罪への傾向をもたらすものだとしました。私たちには罪に対して罪責があり、意志的に罪を犯してしまいます。ウェスレーは「生来の罪」と実際の罪を区別することに明確でした。ウェスレアンによって罪の古典的な定義は「罪は、神の律法を意志的に犯すものである」というものでした。

原罪の教理の発展に関しては、

初期：人間の原初の栄光の姿を描きながら、原罪の事実とそれと比較対照することで、ことさら救いの必要性、堕罪に徹底して染まった自己とそれを取り巻く世界を認識することで、いのちの道を追求することに、より真剣に情熱を燃やすべき。

中期：　原罪の教理は信仰による義認のバックボーンになっていく。原罪とその教理の影響の故に行いに頼ることは出来ず、信仰のみ。

後期：ジョン・テイラーとの論戦　世俗主義と楽観的神論に染まりつつある自国民に対

して原罪の教理を深めていく。（藤本　１２３－１２５頁）

アウグスティヌス対ペラギウス

ペラギウス：　ペラギウスは、人間はアダムよりの罪責を遺伝していないだけでなく、どのような崩壊も継承していないという立場を貫きました。それ故に、各人はエデンの園でアダムとエバがおこなった同じ選択を行うことができるとしました。私たちは、自然の自由をもって生まれてきたのです。

アウグスティヌス：一方アウグスティヌスは、原罪の教理、全的堕落、遺伝的な罪責を強力に唱えました

ウェスレー：中庸を示すvia mediaという言葉は、ウェスレーの先行する恵みの教理を通してもたらされるものです。この世に生まれる各々の人間に与えられる神の恵みによって、人に恵みの自由さを与えます。確かに、人は、罪への傾向はあるのですが、恵みは与えられているので、実際の罪は、私たちを責任ある者とする選択に委ねられて居るのです。

堕落性（ウェスレー）　対　堕落性（カルヴァン）

ウェスレーの人間性理解と救いの鍵概念は、堕落後も神の像は残るということです。像は歪んでしまいますが、跡形もなく消え去ったのではないのです。それゆえに、ウェスレーにとって救いは、広く定義され、聖化も含めた形になっており、私たちの中の神の像の回復と更新を意味しています。

堕落　（ウェスレー）

堕落によって、神との原初の関係が断たれてしまいました。それ故に、私たちの関係そのものが歪曲されているのです。しかし、愛の能力、刷新の希望は残っているのです。なぜならば、先行する恵みが堕落の効力を取り消しにするために与えられたのです。

堕落（カルヴァン）

堕落によって、私たちは全的に腐敗してしまっており、人間が自力で修復できる限界をこえている。

人間の状態

自然の状態　堕落後では自然の状態は、仮定の状態です。善を選び取ることも、それを実行することも出来ない状態

律法的な状態　この言葉でウェスレーが意味するのは、新生の経験をする以前の私たちの状態を意味します。私たちは律法のもとに生きており、律法の本来の役目は、私たちにとって救いが必要であることを認識させることにあります。

福音的な状態　福音的な状態とは、キリストにおける新生後に起こることです。私たちはもはや律法の下にいるのではなく、恵みのもとにいるのです。この新生は、私たちにおいて神の像の刷新の過程においてはじまるものです。

罪　ウェスレーは高慢という言葉をしばしば用いましたが、それは原罪の範疇のすべてを包含するものとしては決して使いませんでした。ウェスレーのこの教理に対する説教は「原罪」(1854)ですが、ここでは高慢が原罪そのものであるとは言っていません。この説教においては、偶像礼拝が、原罪の第１の定義として分類されていたのです。

霊的偶像礼拝　お互いに愛し合うことは神の御意志であることは疑う余地のないことです。私たちが関係性を大切にし、特別に愛をもって愛することは神の御意志です。その為に私たちの魂にとって、大いなる財産をもたらしてくれる人々を友人に持つことは重要です。私たちは、「熱心に愛する」と同時に「きよい心をもって愛する」ことが命令されています。しかし、愛情において強さと優しさを同時にもち、魂にしみもなく、汚れのない純粋さをもつことは「人には無理」ではないでしょうか。特に偶像礼拝ではない形の純粋な愛は可能なのでしょうか。これは創造主よりも被造物をより愛することにならないのでしょうか。それは神の立場に人間を置くことにはならないのでしょうか。これは注意深く考慮されなければなりません。特に神がむすびあわされた夫婦、親と子でさえそうです。これらの人々が優しく愛し合わなければならないことは言うまでもありません。そのように命じられているのです。しかし、偶像礼拝的に愛し合ったりすることは、命令されてもいませんし許されてもいないのです。しかし、何と偶像化してしまうことが度々起こってしまうのでしょうか。何としばしば、夫、妻、子どもを神の位置に置いてしまうのでしょうか。よきキリスト者と言われている人が、いとも簡単に神の地位に相手を置き換えてしまうのです。彼らは、創造主である神ではなく被造物の中に幸福を求めてしまうのです。

罪概念の現代的な適用について

人間の最大の特徴は自由

マーチン・ルーサー・キングは自分たちの運動を「自由への大いなる歩み」と呼びましたが、人間の歴史全体がこのような歩みでした。キングは人間であることは自由であることと定義します。しかし、自由には責任が伴います。無責任な自由な自己中心のわがままであり、隣人を傷つけ、社会的連帯を破壊します。人間の自由は「神の似像」としての人格性にもとづくものですから、自由の乱用は、根本的には人間の神への応答性の放棄として考えられます。これが罪です。

罪の定義は的はずれです。　的をはずれた流れ矢のように、人間としての目標からはずれ、照準の狂った生活を意味するのです。人間は神に答え、神に聞き従うことによって真の人格となれると聖書は語ります。

創世記３章　罪の代表的な例としては、エデンの園（エデンとは喜び）をあげることができます。　この箇所では、へびがエバを誘惑。なぜ神は人間が誘惑に会わないように守らなかったのか。それは神が人間を自由なものとして造られたから。自由な人生は選択の人生。人間は神の命令にそむき、自分が神になろうとし、欲望のままに行動します。その結果、祝された生活を喪失してしまう。人間喪失。この物語には罪の特徴である「神への背反」（不信仰）、「自己の絶対化」（傲慢）「不当な要求」（欲情）という３つの面が示されます。

神への背反（不信仰）へびの質問　「園のどの木からも食べてはいけないと神はほんとうに言われたのか。」だれでも「ほんとうにそうか」と問われると確信が持てなくなるのです。「ほんとうに」と言われるのは神だけであって人間は曖昧さが伴うものです。アダムとエバは自分の側の中途半端さ、不確かさにひきずられ、神の真実に対する信頼を失ってしまいました。

　神への信頼が失われると人間の生活に中心がなくなります。しかし人間は何かに頼らずには生きていけないので、神以外のものを生活の中心にすえ、それを拠り所として生きようとします。それらは被造物であり、創造者なる神を見失った者は、ほかのものにより頼みます。それが偶像礼拝というものです。偶像礼拝は、人間や動物や自然を拝むという宗教的な形であらわれることもありますが、金や地位、学歴などを最大の価値と考えてしまいます。十戒の第一戒めは、「あなたは私のほかに何ものをも神としてはならない」である。罪の根本は第１の戒めへの背反であり、神にそむく生活です。

人間の傲慢（自己の絶対化）

神に背いた人間は、結局は自分を神とし、自分を絶対化する傲慢に陥ります。へびは「神のように善悪を知るものとなるであろう」と語ります。人間は被造者であるにもかかわらず、神は自由な人格を与え、神のパートナーとして、神と交わり、世界を管理する特権を与えました。ところが人間は傲慢に膨れ上がり、神をあなどり、人をみくびって生きるようになりました。「神のようになろう」とする人間は権力を求めます。権力を得るために他者と戦い、自分に服従させなければなりません。アウシュビッツや南京大虐殺もその例です。

欲情としての罪

神を無視し、自己を絶対化する人間は、必ず自分の欲望を満たそうとして放縦の生活におちいります。蛇の誘惑では「いかにもおいしそうで、目を引きつけ、賢くなるように、そそのかしていた」とあります。これは人間の身体的欲求、文化的欲求、精神的欲求をあらわしているとされます。欲求や願望は、決して否定する必要はありません。聖書は禁欲主義をすすめてはいません。むしろ神が人間に与えている賜物を感謝して受け取り、それを生かし用いることがすすめられています。自己主張としての傲慢の罪の反対に、神が与えたものを無視してそれを活用しない、怠慢の罪もあります。

真実に応答しようとしない人間　エデンの園における神の呼びかけ「あなたはどこにいるのか」

この呼びかけは、的をふみはずしてしまった人間と、それでも人間を追い求める神の姿を見ます。的はずれの罪に陥っています。一時的恍惚的な快楽を与えても、やがてはみじめな幻滅におわります。人間は自由な人格として、神のかたちに創造されたという光栄を持つと同時に、神に語りかけに、また他の人間からの呼びかけに真実に応答しない人間を示しています。

人間が、神から与えられた尊厳性を持って使命を遂行する為には、人間の主体的自由が問われなければなりません。「神にかたどって」創造され、神の恵みによって「生きる者」とされた人間には、自己の行為を自ら選び、決定する自由が許されています。

しかし、人間は、神によって存在の根拠が与えられたものであり、神と等しくなることはできない有限性を持っています。その選択・決定のための基準として、神の命令を選ぶことが強く要求されています。（出エジプト２０章１－１７節）したがって､罪とは人間が自分の有限性を忘れて神を無視し､神の命令に背くことが｢罪｣という概念を生み出す。聖書がこの罪を重大な罪とするのは、罪が「神のかたち」「生きる者」として神から与えられた尊い特性を、人間自らが汚し、崩壊される原因となること。罪が生み出す人間における自己絶対化が自由の行使に狂いをもたらし、それが様々な矛盾の種となって、虚無と不安と悲惨の状況を生み出します。

資料５　説教　「原罪」を読んでみましょう。